

緑と共に

下長中学校 三年 鈴木 優羽唯

私の祖母の家は、たくさんの自然に囲まれている。祖母の家の窓を開けて、一番初めに目に入るのは、人でも、家でも、車でも道路でもない。一言でいうと、「緑」。そう、「自然」。家の周りには花が咲いていて畑があり、雑草が生い茂っている。そのせいも、虫も多く、野良猫やへび、そしてキツネやクジャク、タヌキなども見られる。そんな家に当時の私は嫌気がさしていた。夏は、自然に囲まれているため、もちろん虫は多く、夜は虫の鳴き声がうるさく、秋や冬は夜中にキツネなどの鳴き声が響き渡る。私は自然に対してあまりいいイメージをもっていなかった。

「ミーンミーン」真夏のある日、セミの鳴き声がうるさく響いている。その日はとても暑く、見上げると、太陽がきらきらと私を照りつけていた。

「お花や周りの木たちにお水をあげてちょうだい。」

外に出て太陽とにらめっこしていた私に祖母が言った。

「ついでにその周りに咲いている緑の花にもあげてちょうだい。」

私の頭は「はてな」でいっぱいになった。

「ん？、緑の花は？」

ぼかんとしている私に祖母は、

「そこにいっぱい生えているでしょ。」

と言つて、にこつと笑っている。

「雑草のこと？」

私は驚きながらも、雑草に水をやり、祖母の所へ戻ると、祖母は横にある畑に移動し、私の弟と何かの種を植えていた。

「何の種？」

と私が聞くと

「さつき食べていたスイカの黒いやつ。」

と弟が言った。私は驚いた。

「スイカの黒いやつって、さつき食べていたスイカの種ってことでしょ。そんなの植えたところで芽も何も出てくるわけじゃないじゃん。」と言つて私が笑っている、

「分からないでしょ。やってみないと。」

「そーだよ。」

と怒り気味な弟。なぜか無駄に怒られた気分。私。芽も何も出てくるわけがないのに……。心の中でそう思いながらも、少し期待している自分がいた。

次の日、朝起きて昨日種を植えた場所に行き、気づいたら私はその種に水をやってた。少し興味が湧いていた。二週間がたった頃、私はスイカの種が気になりすぎて、祖母の家に行つてみることにした。芽、出てるかな。急いで見に行つてみた。畑に着くと、「すいかです」と書かれた手作りの小さい旗のようなものが刺さっていた。すぐにその周りを見渡してみた。しかし、芽などまったく出ていなかった。私は、

「やっぱり生えてくるわけないよな。」

とつぶやき、少し期待していた自分がばからしく思えた。その日はがっかりしたまま、すぐ家に帰った。

種を植えて何か月かたったある日、テレビで大きなスイカが映っていた。私はスイカの種を植えていたことさえ忘れていた。しかし弟が、

「スイカだ。植えたやつ、どうなったかな。」と、とても大きな声で言い出した。それを聞いた私はやっと思ひ出し、次の日、見に行つてみることにした。祖母の家に着くと、弟は走つて畑に向かった。私は芽は出ているはずはない、という思いで、走つて見に行つたところで意味がないと思つていた。すると、

「うわあああ。でああ。」

と弟の叫び声が聞こえた。私は走った。芽は本当に出ていた。

「自然の力つてすごいね。」

と弟が叫んでいる。両親もその声を聞き走つてきた。私はその芽を見て思った。自然の力つてすごい。自然をこれまで以上に大切にしなければいけない、と。

私がこうして生きているのと同じように、祖母の家の周りの自然も、生き生きと活動している。私たちの手でたくさんの種を植え、今ある自然を守つていきたい。私はこれからも、たくさんの、緑と一緒に楽しく暮らしていきたい。